

2016年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

2017年 4月 28日

和光大学地域連携研究センター
センター長 小林 猛 久 殿

代表者氏名 大橋 さつき

研究プロジェクトの名称							
共生・共創をめざした創造的身体表現遊びの実践							
ー地域と大学の連携による子育て支援・障がい児支援の取り組みを土台にー (1 年目)							
研究目的							
本プロジェクトは、和光大学の学生・卒業生と地域の子どもたちや大人たちが、ダンスやアート、太鼓等の表現あそびのワークショップを楽しみ、それらを活かして舞台発表という新しい「場」を生み出すことを目的とした。舞台活動という課題を通して、地域と大学の連携により実現する創造的な身体表現遊びの場が、いかに「共に生きる場を共に創る」体験を促進することができるのか、また、その場の体験が、一人ひとりの変容にどのように関係するのかについて考察することをねらった。							
プロジェクト所属メンバー (氏名の右の欄に、本学専任教員=教、共同研究員=共と記入してください。)							
大橋 さつき	教	野中 浩一	教	惠濃 志保	共		

研究活動の経過 (800字以内) (打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。)

本プロジェクトの予備的実践研究として、2016年2月に地域住民を対象とした連続4回のワークショップを実施した (開放センター主催地域連携講座「心音」 ; http://www.wako.ac.jp/info/news_entry/3890.html)。2016年4月から7月は、週1回のペースで会合を持ち、これらのプレ企画の結果を受け、プロジェクトメンバーに卒業生講師 (4名) と学生リーダー・スタッフ (20名) を加えて意見交換を重ね、実践内容の詳細 (特にワークショップの形態、回数、参加人数等) について検討を続けた。

企画内容の確定後、2016年9月、参加者募集の情報を大学HPやチラシで公開したところ、定員を超えた応募があった (http://www.wako.ac.jp/info/news_entry/4376.html)。地域からの参加者は、障がいや年齢 (0歳児を含む親子から60代女性まで)、経験に様々な違いのある31名が集った。

本プロジェクトのワークショップは実施日と各回のテーマについては以下のとおりである。実施時間は、①のみ13:00~15:00、その他は全て10:00~12:00、場所は、体育館1階 ダンス演習室。

2016年 ①10月23日 (日) プロジェクトの概要説明と「身体表現遊び (プレ企画のおさらい)」
 ②11月13日 (日) 「光・太鼓」
 ③11月27日 (日) 「音 (楽器づくり・音遊び)」
 ④12月 4日 (日) 「ことば」
 ⑤12月18日 (日) 「アート (ペイント)」

2017年 ⑥ 1月29日 (日) 「チンドン」
 ⑦ 2月12日 (日) 「お披露目会 (基礎編の活動のまとめ)」

また、基礎編の活動をもとに舞台発表にむけた応用編 : (⑧2月26日 (日)、⑨3月5日 (日)、⑩3月12日 (日)、時間は10:00~12:00、場所は体育館アリーナ) を実施し、大橋研究室の学生たちによる舞台公演「和光大学 Dance Performance Project Merry Zome 015」にて、招待作品として上演した。公演日 : 2017年3月16日 (木)、会場 : 相模原南市民ホール (小田急線相模大野駅徒歩10分、客席数400)。応用編では、地域住民23名が学生・卒業生と共に舞台上での表現に挑戦した。

研究成果の概要（1200字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

本プロジェクトの活動全体を通して、映像による記録と、参加者を対象としたアンケート調査や聞き取りを実施した。

まず、2016年度の本プロジェクトの実践における特徴は、学生リーダーの活躍が目立った。プレ企画では、卒業生講師が全てのプログラムを率いたが、それらを体験した学生たちの中から、主体的に企画運営にかかわるメンバーが集り、自らリーダーが担当するプログラムの準備を始めた。プロジェクトメンバーも卒業生講師もこの動きを尊重し、「学生講師」と明示して企画を進めたところ、他の学生たちの積極性も増し自由な発想で意見交換がなされるようになり、プログラム内容も発展した。学生たちの変容から、本プロジェクトのような実践は、大学の教養教育としての価値があり、既存の知識を得る受動的な知だけでなく創造的な活動を行うための知の育成や異質な他者との協同体験を重視した取組みとして、その成果を期待できると考えられる。

また、地域住民の参加者との継続的な交流の様子からは、学生を含め「生活圏」を共にする多世代・多職種のかかわりそのものとして希少価値があること、子どもの育成・支援における連携強化、地域コミュニティの活性化において意義があることが考察された。

さらに、活動を通して、参加者の間には、身体感覚を「共に」することを原点に、動きやリズムの共有、空間や道具の共有、まなざしの共有、意図や意思の共有、そして、経験の共有と様々な「共有体験」が生まれている。彼らは互いに分かち合い支え合う「共感的他者」となり、舞台作品を共に創りあげる過程においては、充実した協働の営みを展開した。それは、他人から与えられた場への見せかけの参加やその場限りの参加ではなく、「参画」と呼ぶ段階に近いものであろう。様々な違いのある人たちが集い、遊びの場を体験することが地域社会の構築に参画、協働する原動力となっている様子が確認された。

今回、舞台上演にむけて発展させるための手法としては、振付けや構成を覚えて稽古を重ねるといった「修練」として活動ではなく、あくまで「遊び」活動として積み上げてきた営みを土台に、即興的な表現も含め、自然な形で各々が舞台上で表現できるように工夫を重ねた。この点については大枠成功し、参加者だけでなく、成果発表時の観客のアンケートからも十分な手応えがあったと言えるだろう。

しかしながら、2016年度の取組みにおいては、舞台上演という実践活動に力が注がれ、豊富な実践記録に対して、十分な分析、考察ができていない。よって、2年目となる2017年度においては、プレ企画も含め、本プロジェクトのこれまでの活動をふりかえり、まずは、実際の記録をもとに実践の詳細を報告することを目指したい。WEBサイトを活用し、活動の様子や参加者の感想などを中心に学内外に情報を発信していく予定である。また、成果物出版、学会報告、シンポジウムなどを積極的に行い、本プロジェクトの意義について理解を深め、一定の結論が結実できるように努力する所存である。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2016年4月～2017年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

「和光大学学生の価値観とユニバーサル化時代の大学の在り方」、野中浩一、和光大学現代人間学部紀要 第10号、141-158、2017年。

『『人間的全体験』としてのダンス』、大橋さつき、女子体育、第59巻第4・5号、40-43、2017年。

舞台作品「心音」、2017年3月16日（木）（開演17:30）、相模原南市民ホールにて発表。舞台発表の様子や活動紹介について、WEBサイト <http://www.wako.ac.jp/~satsuki/kokorone/index.html> にて公表（準備中）。

※ 提出期限=2017年4月28日（金） 提出先=企画室企画係（担当：奥名）

※ 用紙が足りない場合は別紙を添付してください。

※ できるだけワープロで記入し、e-mailで送信してください。

※ kikaku@wako.ac.jp（企画係）